

18. 感染制御センターが持つ「保健所の感染症対応を支援する機能」は現状の衛生環境研究所に設置でよいと思いますか。

はい → 質問 19 へ

いいえ → 質問 20 へ

19. 衛生環境研究所へ設置したほうがよいと思われる理由を選択してください。(一つ選択)

- (1) 検査部門との情報共有が必要だと思うから
- (2) 感染制御センタースタッフも検査するために都合がよいから
- (3) 衛生研究所は技術職が集まる場所だから
- (4) 他に適切な場所がない
- (5) その他 → 具体的に記載ください

20. 衛生環境研究所へ設置しないほうが良いと思う理由と適切な設置場所(案)を記載ください。

衛生環境研究所へ設置しないほうが良いと思う理由:

他の適切な設置場所(案):

21. 「保健所の感染症対応を支援する機能」に求めることを選択してください。(1つ選択)

- (1) 現場対応はしない学術的助言者
- (2) 現場対応する学術的助言者
- (3) 集団発生対応チームの指揮者・リーダー
- (4) 保健所の活動の人的手伝い(学術的助言はしない)
- (5) 検査業務
- (6) 衛生研究所の検査部門と保健所との事務的仲介役
- (7) 県庁と保健所との事務的仲介役
- (8) その他 → 具体的に記載ください

22. 感染制御センターへの出動要請数を事例単位でお答えください(おおよその数で結構です)。

●昨年度 _____ 件 / ●今年度(2008年12月まで) _____ 件

23. 「保健所の感染症対応を支援する機能」を活用していると思いますか。

- (1) 非常に活用している
- (2) ある程度活用できている
- (3) 機会があれば活用したいと思うが、あまり活用できていない
- (4) 機会があれば活用したいと思うが、集団発生を経験していないため活用する必要がなかった
- (5) 基本的に活用したくないが、ある程度活用している
- (6) 基本的に活用したいと思わないため、あまり活用できていない

24. 「保健所の感染症対応を支援する機能」を活用した場合の感想を選択してください。

- (1) 機会があれば今後も活用したいと思った → 理由を記載ください

- (2) 今後は活用したくない → 理由を記載ください

25. 集団発生事例において県庁などから当該保健所に対して感染制御センターに支援を要請するよう助言があるにもかかわらず、「支援要請しない」と保健所長(感染症担当者)が判断した場合、その理由として推測される事柄を選択してください。(複数選択可)

(1) 感染制御センターの助言内容は保健所の意図・方針とは異なる →具体的な例を記載ください

(2) 感染制御センターが対応する法的根拠がない

(3) 保健所だけで十分対応できる

(4) 外部から介入されたくない

(5) その他 →具体的に記載ください

26. どのように改善されれば、「保健所の感染症対応を支援する機能」をより積極的に利用しようと思えますか(自由記載)。

【感染制御センター全般に対するご意見】

●感染制御センター(「保健所の感染症対応を支援する機能」以外の機能も含めて)について伺います。

27. 感染制御センターの各種業務は、今後も必要ですか。

(1) 感染症患者についての疫学情報収集の方法や収集内容に対する助言

必要 ・ 不要

(2) 集団発生への初期対応(感染拡大防止策や消毒方法)

必要 ・ 不要

(3) 集団発生の全体像を把握するための方法に対する助言

必要 ・ 不要

(4) 集団発生の感染源・感染経路・感染危険因子を特定するための疫学調査への助言

必要 ・ 不要

(5) 県民・保健所職員に対する感染症関連の相談対応

必要 ・ 不要

(6) 研修・啓発活動

必要 ・ 不要

(7) 検査業務

必要 ・ 不要

(8) マスコミ対応

必要 ・ 不要

(9) 新型インフルエンザ対策準備

必要 ・ 不要

(10)各種感染症のマニュアル作成

必要 ・ 不要

28. 今後、感染制御センターを利用しようと思いますか

はい しいえ

29. 感染制御センターは今後も必要ですか

必要 → 質問 30 へ 不要 → 質問 31 へ

30. 感染制御センターは必要だと思う理由をご記載ください。 → 回答後に質問 32 へ

31. 感染制御センターは不要だと思う理由をご記載ください。

● 貴保健所における感染症対策業務に対するご意見をお伺いします。気軽に、率直にお答えください。

32. 科学的根拠に基づいた感染症対策を行うべきだと思う。

非常に思う ・ ある程度思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない

33. 科学的根拠よりも、以前から実施されてきた方法や経験を応用したほうが保健所になじむと思う。

非常に思う ・ ある程度思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない

34. 「感染症」の専門的知識がなくては感染症の集団発生対応は行うことができないと思う。

非常に思う ・ ある程度思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない

35. 「疫学」の専門的知識がなくては感染症の集団発生対応は行うことができないと思う。

非常に思う ・ ある程度思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない

36. 食中毒か感染症かで結論が出ないことを原因として、集団発生事例への初期対応が遅れることがある。

よくある ・ たまにある ・ あまりない ・ 全くない

37. 対応方法がわからないことが原因で、集団発生事例への初期対応が遅れることがある。

よくある ・ たまにある ・ あまりない ・ 全くない

38. 感染症や疫学の新たな知見を学び可能な限り実務に応用したほうがよいと思う。

非常に思う ・ ある程度思う ・ あまり思わない ・ 全く思わない

39. 感染制御センターに対するご意見・ご要望など自由に記載ください。本質問は未回答でもかまいませんが、わが国の地方行政における疫学機能の強化のために率直なご意見をいただければ幸いです。

お忙しいところご協力ありがとうございました。

平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金健康安全・健康危機管理総合研究事業
「地域における健康危機に対応するための地方衛生研究所機能強化に関する研究」
分担研究報告書

疫学情報解析機能の強化と人材育成に関する研究
～理化学分野における疫学機能強化について～

分担研究者	前田 秀雄	東京都健康安全研究センター
研究協力者	神谷 信行	東京都健康安全研究センター
研究協力者	阿保 満	東京都健康安全研究センター
研究協力者	岸本 剛	埼玉県衛生研究所
研究協力者	加藤 政彦	群馬県衛生環境研究所
研究協力者	森田 幸雄	群馬県衛生環境研究所
研究協力者	鈴木 智之	群馬県衛生環境研究所
研究協力者	堀元 栄詞	富山県衛生研究所
研究協力者	小野塚大介	福岡県保健環境研究所

A. 研究目的

本研究では、地方衛生研究所の理化学部門における特徴について明らかにし、地方衛生研究所の理化学分野における疫学機能強化に資することを目的として検討した。

B. 研究方法

調査期間は平成 20 年 12 月から平成 21 年 1 月で、福岡県保健環境研究所の理化学部門に所属する職員に対して聞き取り調査を実施した。調査内容については、昨年度の研究で検討がなされた PRECEDE-PROCEED モデルの結果に基づき、前提要因（事業に先立つ要因、その事業の論理的根拠や動機となる要因）、実現要因（疫学事業を実現させるための要因）、強化要因（疫学事業が継続して実践されるよう持続的にインセンティブを与えうる要因）の 3 要因とした。

C. 研究結果

前提要因に関する事項として、「疫学は大学の時のカリキュラムにない」、「薬学部でも、薬理以外の分野（合成、実験）では疫学を利用する機会

がほとんどない」、「実験化学では分析法の習得が重要」、「いかに正確な測定をするかが大事」、「実験化学は泥臭くて苦勞も多いが、出てきた結果は信用できる」、「実験による実測値で勝負」といった意見が挙げられた。また、疫学＝統計・パソコン処理という認識に基づいた意見もあげられ、「統計処理はラボでの分析の後にやることであり、二の次」、「統計はあくまでも推定であり、信用できない」、「統計は楽をしているという印象」、「パソコンやソフトがあればすぐにできる」といった事項も指摘された。

実現要因に関する事項として、「みんなバラバラ」、「材料を自分で作っていない」、「データは他から自動的に入手」、「論文を作成する時には必要という程度」といった意見が挙げられた。

強化要因に関する事項として、「分析の仕事だけで手がいっぱい」、「疫学は自分たちの仕事ではないので関係ない」、「かかると面倒」、「疫学だけがすべてではない」といった意見が挙げられた。

D. 考察

地方衛生研究所の理化学部門で実施されている業務についてまとめると、実験化学を基本としたものが主流となっており、構成する職員も実験系をバックグラウンドとしているものが多かった。また、理化学部門で取り扱われているデータは、実験者の苦勞によって得られた実測値がほとんどであり、それらの結果を得るまでの過程が非常に重視されていることが示唆された。

しかしながら、理化学部門から疫学部門を眺めた場合、地方衛生研究所の疫学部門で取り扱われているデータは、コンピュータ等を利用して外部からほぼ自動的に入手されるものが多いと認識されており、自らが汗を流して調査したデータというものはほとんどみられないと考えられていた。また、統計処理によって得られた情報はあくまでも推定であり、実測値と比較すると信頼性も乏しいとも考えられており、実験化学を専門とした人がほとんどである理化学部門の人にとって、疫学データというものが全く重視されていないことが示唆される結果となった。

理化学部門では、大学等の教育機関において専門知識を習得する過程で、疫学を学ぶ機会がほとんどないことから、疫学に対する認識不足や誤解が生じており、さらに統計学や情報処理との誤解によって、理化学部門における疫学機能強化の阻害要因となっていることが示唆された。また、疫学研究を実施する場合には、研究デザインの設計からデータ収集、分析に至るまで非常に労力が伴うものであるが、この点についても理化学分野の人には十分理解されていないこともあわせて示唆された。これらのことから、日常業務における疫学部門との希薄な関係性を少しずつ解消し、お互いの業務内容が十分把握されるようになれば、理化学部門においても疫学機能強化の実現が十分可能であることが示唆された。

E. 健康危機情報

なし

F. 研究発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

Ⅲ. 研究成果の発表に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Fukushima, H., Katsube, K., Tsunomori, Y., Kishi, R., Atsuta, J. and Akiba, Y	Comprehensive and Rapid Real-Time SYBR Green I PCR Detection of Food-borne Pathogens in Feces from 21 Bacterial Food Poisoning Cases in Shimane Prefecture, Japan.	Int. J. Microbiol.		http://www.hindawi.com/journals/ijmb/aip.917623.html	2009
伊藤雅、山下 照夫、都築秀 明、椛島由佳、 藤浦明、長谷 川晶子、長谷 聡子、榮賢司、 皆川洋子	Human parech ovirusの検出 ならびに同定 方法の検討.	愛知県衛生研 究所報	58	1-8	2008
山下照夫、伊 藤雅、水谷絵 美、藤原範子、 皆川洋子	無菌性髄膜炎 からのエンテ ロウイルス検 出状況、2004 ～2008年.	病原微生物検 出情報	30(1)	6-8	2009